

---

# バカとテストと魔法ツカイ。

庵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと魔法ツカイ。

### 【Nコード】

N0032BA

### 【作者名】

庵

### 【あらすじ】

バカテスの世界に東方のあのキャラたちがやってきた！？文月学園を舞台に繰り広げられるドタバタ二次小説コメディ！

## 一 ページ目。 夏の転校生（前書き）

注意！

これは東方とバカテスの二次創作です！

作者独自のキャラ付け、パラレルが嫌いな人はできるだけ我慢するかブラウザのバックを押してください。

## 一 ページ目 夏の転校生

（某所校長室）

「……………学園長。コレはなんですか？」

「そう非難がましい目をするんじゃないよ。ちょっとシステムの調整に失敗しただけじゃないか」

「……………これのどこが、ちょっとですか」

「ちょっとみてくれが違うだけさね」

「ほほう。そうですか」

「ああそつた」

「……………」

「……………夏、だねえ……………」

「学園長。遠い目をしてても無駄です」

「ええ。その通りですわ、学園長さん？」

「！？！？！？！？」

「……………ああ、そういえばアンタもいたんだねえ……………」

「今日は少しご相談があつて参つたのですが…おじゃまでしたわね」

「いや、構いやしないさ。それで相談つてのはなんだい？」

「……すみません学園長。まったく話についていけない上に私にはこの人が浮いているように見えるのですが」

「ええ、浮いてますもの」

「いや、浮いてますもの、じゃなくて…」

「その件についてはあとで説明するさ。それで相談の件はどういう内容なんだい？」

「ああその件ですがこの学校に……」

↳文月学園F教室↳

「そういえば雄二。今日つて転校生が来る日だったよね？」

「バカにしてはよく覚えてたな」

「そりゃ一気に10人以上転校してきたらだれでも覚えるよ!」







教室男が多いな。女が私たちを含めて5人しかいないぜ。

「お前達静かにせんかあ!!!!!!!!!!」

西村先生の一喝によって教室が静まり返る。うちの親父くらい迫力ある怒鳴り声だな。

「後一人転校生がいるんだが…遅れていてまだ来ていない」

「待つてええええええええええ!!!」

ちょうどその時、廊下から走ってくる音と声が聞こえた。…あの声は妹紅か？

「おお、噂をすれば来たな。初日から遅刻とは何事つ……………!?!」

ん?なんで西村先生はあんなに狼狽えてるんだ?まさか妹紅が上半身裸なわけでもあるまいし。

「ふう…。これってギリギリ間にあつたよな?…おう。魔理沙。久しぶりね」

「なつ……………!?!」

『『『

『@!?!?』』』

上半身裸だった。

「なんでお前上半身裸なんだ!?!そして常識的にどうなったらそうなるんだぜ!?!」

「いやあ、さつきまで輝夜と死合してたらいつの間にか裸に」

「おま…なら何か来てこいよ！！ここは女子校でもなんでもないんだぜ！？」

「着てたら遅れるのよ！！」

「何で私が怒られてるんだ！？ああもういいこれでも持つといてくれ！」

私は服の代わりに妹紅に座布団を投げた。…とうかなんでこの教室カーテンすらないんだ…？

『ぐはあ！！』

『！？おい！横溝っ！横溝お！大変だ！横溝が倒れちまったあ！』

『ええい！横溝なんぞどうでもいい！誰かカメラを持ってないか！？…そうだ！ムツツリーニ！ムツツリーニは！？』

『……………つだめだ！！ムツツリーニが息をしていない！！カメラも血の海に沈んで壊れてやがる！！』

『……………愛を超越すれば、それは憎しみとなる』

『ムツツリーニらしからぬ言葉を…お迎えが来たのか…』

『……………だがそれも超えれば宿命となる』

『よかった…いつものムッツリー二だ…!!』

『……雄二。浮気は駄目（ブスリ）』

『のわああああ!!?目がっ目がああああああ!!』

私達がこんなやりとりをしている間に教室は修羅場と化していた。……というか死人が出かねない勢いなんだが…。

「あ…。とりあえず俺は妹紅の服を調達してくる。静かにしておくように」

そう言っつて西村先生は教室からでていった。…これあんたが出てつたらさらに収まりがつかなくなると思うんだが…。

『ノーレッジさん』

「パチユリーでいいわ」

そんな修羅場からいち早く立ち直った一人の生徒がパチユリーに話しかけていた。

『なら、パチユリーさん、僕と付き合いませんか?』

『須川会長。異端者を発見いたしましたがいかがいたしましたしょう』

『ふむ…。こつこつ場合民主的に決めるべきだろう。皆の意見はどうだ?』

『死刑』

『死刑』

『惨たらしく死刑』

『よろしい、ならば指を一本一本きれいに180度曲げた後、姫路特製ゼリーの刑に処す』

『よかつたな。憧れの女の子の手料理だ』

『いやだあああああ!!! 姫路さんの料理だけはあああああああ  
ああ!!!』

なんか今パチュリーに言い寄っていった男子その1がすごい勢いで連れ去られていった。……こっちの学校ってなんだか壮絶だな……  
とりあえずあの男子生徒に……南無三。

そんなこんなで波乱の朝休みが終わり（犠牲者2人）、授業が始まった。

こんなクラスでも授業中は一応静かで滞りなく進んだ。しかし……  
……振り分け試験の時もそうだったが問題がまったくわからん。読めないわけじゃ無いんだが……いままでの魔法とかの研究とあまりにも  
違いすぎてピンとこない。

そんなかなり苦痛だった授業が終わり、昼休みになった。

授業が終わると同時に私とパチュリーと妹紅は屋上に向かった。  
あんな教室（ふくろ）にいたら体がいくつあっても足りない。

「ふう…やつと終わったぜ」

「なかなか興味深かったわね」

「なにがだ？」

「授業」

「…お前実は変態じゃないのか？」

「失礼ね。魔理沙はともかくあなたには言われたくないわ」

「変な言い方をするなよ。それじゃあ私が変態みたいな言いになるじゃんか」

「いや、変態だろ（じゃないの）」

「おい、霧雨、パチュリー、妹紅、いるか？」

と、ちょうどそこで屋上に人が現れた。…確かあれはFクラスにいた生徒だったと思う。

「おう、いるぜー」

「一緒に昼いいか？」

「もちろんいいぜ」

「ちょっと、何一人で決めてるのよ」

「いいじゃないか、減るもんじゃないし。妹紅もいいか？」

「どっちでもいいよ」

「と、いうわけだそうだ」

「じゃあ一緒に一緒にさせてもらおうね」

「お、お邪魔します」

「じゃ相伴させてもらおうかの」

「……………よろしく」

「よろしくね。えーっと、霧雨さん」

了承すると後ろからぞろぞろとクラスメイトが出てきた。うーん、  
こんなにいるとは。まあ暇だしいいか。

「魔理沙でいいぜ」

「そう？ありがとうございます。魔理沙」

「それより私はお前達の名前が聞きたいな」

「ああ、そういえばまだ自己紹介してなかったな。俺はFクラス代  
表坂本雄二だ。よろしく頼む」

「同じくFクラスの姫路瑞希です。よろしくお願ひしますね、魔理  
沙さん」

「私は島田美波。パチユリーさんと一緒に帰国子女よ」

「僕は木下秀吉じゃ。演劇部に入っておる。……先に言っておくが男じゃぞ？」

「なるほど。秀吉は冗談が上手いんだな。さすが演劇部だ」

「冗談ではないのじゃが……」

口ではそんなことを言ってるがどう考えても嘘だ。こんなに可愛い子が男のわけがない。

「……………土屋康太。……………よろしく」

「別名ムツツリーニだ」

「……………(ブンブン)」

なんか一生懸命自分のあだ名について否定しているがさっき真っ先に鼻血を吹いているのを見ているのでいまいち説得力が無い。

「それで僕は吉井明久だよ。よろしくね、魔理沙」

「おう。みんなよろしくどうぞ」

「よろしくね」

「よろしくお願ひするわ」

「さてと。これで全員の自己紹介が終わったな」

うーむ、やはり代表。仕切るタイミングとかが上手い。

「まあ飯を食いながら聞いてくれ」

「そんないきなり改まって…何か相談でもあるのか？」

「おつ変態。なかなか勘がいいな」

「ちょっと待ってそのあだ名はいつたいなんなんだ」

「何って…。的確にお前を表すあだ名だろ」

「だ・か・ら私には妹紅という名前があってだな…」

「まあそれは置いていて」

「置いとくな！！」

ふむ、なかなかのスルースキルだぜ。この代表ただもんじゃいな。  
な。

「まあ相談があるのは本当なんだ」

「いつたいなんの話なんだ？」

私が聞くと坂本はそこで声を潜め、ここにいる人間にしか聞こえないように小声で言った。

「……試召戦争を知っているか？」

## 一 ページ目。 夏の転校生（後書き）

はい、初めましての方は初めまして。お久しぶりの方はお久しぶりです。庵です。今回二次創作を書いたのは二本目ですがまだ一本目も終わってません。同時進行です。もう一つの方も興味があったらのぞいてみてください。

同時進行なのでペースは遅めかもしれませんが長い目で生ぬるく見てください。ヌルリ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0032ba/>

---

バカとテストと魔法ツカイ。

2011年12月31日00時52分発行